あり、戦時には運搬に至便である。本廻轉錠と共に大腿部用の大なる釘の重量は、キルシュナー氏錠の六〇〇瓦に比して僅か全量一五〇瓦に過ぎない。尙鋼線使用に際しては特殊なる骨錐のみならず種々なる器具を必要とするのである。反之、釘の使用には單に一個の「ハンマー」を使用するのみであり、しかもそれは、手術用乃至道具箱に見るもので充分なのである。釘打に際しての滑脱は稀であり、破切の如きは更に稀な事に屬する。

アベシニア、スペイン及び支那等の戦線に従軍せる余の門下は次の如き報告を寄せてゐる。即ち移動戦に於ては鋼線伸展法は一度も使用されない。それは附屬器具が容易に揃はぬからである。鋏が足りない、骨錐の部分品が無い。或は一切が揃へば今度は電流の點で駄目になる云ふ調子である。戰鬪部隊が五乃至六ヶ月も一ヶ所に停留せる如き場合に、甫めて鋼線の使用が可能になるこの事である。然し釘による場合には、救急時には、若し錠の無い時は釘から直接牽引する事も出来るのである。大部分の若き外科醫は、釘は危険であると思つてゐる。然し敢て使用してみる氣がないのである。

余が釘を使用して骨折の牽引をなした約三〇〇〇例の良好なる経験より、廻轉錠の使用を推奨するものである。(青島抄)

血圧亢進作用實驗に余等の 使用せる動脈鉗子に就て

D. Y. Solandt, R. Nassim, C. R. Cowan 共述 (The
Lancet, May 11, 1940)

ゴールドブラット(一九三四)は、犬に於ける腎動脈の閉塞は、比較的永續的な血圧亢進を生起せしむと發表し、ナッシュ其他二三の者は何れも同様な結果を認めてゐるのである。トレンデレンブルクの蟾蜍標本を利用し、フラスキオロ及び其他(一九三八)は、ゴールドブラット法に従つて處理された動物の腎靜脈より採取せる血漿内に於て、脈管收縮神經様物質を提示したのであるが、正常壓血液内に於てはかかる物質を發見し得なかつたのである。要するに、ゴールドブラットの腎臓による血圧亢進なるものは、多分は一般的脈管收縮によるものと思考されるのである。故に、脈管を活動せしむるが如き物質が、果して正常壓血液内に存在するやを決定するのは重大なる問題なりと言ひ得るのである。カッツ及び其の他(一九三九)は、血圧亢進せる犬より採取せる少量の血液を、正常壓の犬に移入して何等血壓上昇を見なかつたのである。余等の實驗は短時間内に大量の血液を、血圧亢進せる動物及び正常壓乃至腎剔出動物間に交換せるものである。受血せる腎剔出動物の血圧は一様に上昇し、受血せる正常動物の血圧は不變乃至下

降を示したのである。

血圧亢進は一腎動脈に鉗子を使用する事により生起される(ゴールドブラット)。又「コロデオ・ガーゼ」の内に腎臓の一個を包纏し(グリーンウッド)約三日を経て他の腎臓を除去するのである。

圖の説明 (a)鉗子保持器 (b)鋸齒狀端
(c)發條鋼部 (d)8吋の適用具柄
(e)固定螺旋 (f)ドライバー (g)挾壓板
螺子 (h)發條部への刻み目 (k)挾壓板
(l)動脈 (m)動脈鉗子

余等の實驗に使用せる鉗子は插圖の如く、構造及び使用法共にゴールドブラット鉗子よりも簡單である。適用具は眞鍮製であり、鉗子には銀を使用した。鉗子の挾壓板は挾壓螺子の先端に鈹附きなしてはあが、螺子の廻轉は自由である。鉗子は

插圖の如く、鉗子保持器の發條部により適用具に保たれ、鉗子はその頭部の刻み目によつてしっかりと保持する發條部は、柄部内に固定される。次いで「ドライバー」は鉗子螺旋を廻轉せしむべく自動的に柄部中心に插入されるのである。挾壓板を頂點に開持し置くならば、動脈を插入するのは容易である。

余等の實驗の結果、カッツは移入せる血液量が少量に過ぎたるが爲、血圧を亢進せしめる物質の存在を見出し得なかつたと言ひ得

るのである。受血せる犬に於ける腎臓が機能完全なる場合には、血圧は上昇せぬ事實よりして、余等は正常腎臓は血圧を亢進せしめる物質を防ぐ結論するのである。血圧亢進せる血液を受入せる犬の腎臓を剔出せる場合は、血圧は亢進するのである。(青島抄)

新 器 械

„Mutata “グリセリン」灌腸器

本灌腸器は本質的に新味のあるものであつて、管筒及び兩端閉塞部は溫度に對して相當の抵抗力を有する材料を用ひ、管筒は透明且つ一四〇度に於ても何等變化を生ぜぬもので製作されてゐる。兩端部の材料は、在來の硬「ゴム」に比して多くの長所を有し、嘴管捻込後は絶対に弛む事は無い。尙や、高温の液體を通じて變化がない。希望により、不透明管筒を有する